

その一

【原文】

神者皆以規正、其根太相、太相繫於帝王、因以正天行之。其次根繫於皇后、因以順地理。中根繫於衆聖、因以理陰陽。細微小根繫於庶民、因以理萬物。大人爲之得大、中人爲之得中、小人爲之得小、皆可  
有正也。帝王行道德興盛、日大明、少道德少明。皇后行道德、月大光明、少道德少光明。衆賢行道德、  
星曆大耀、少道德少耀。四根俱行道德、天下安寧、瑞應出、大光遠。遙觀天象、風雨時善、夷狄歸心、  
災害自消。今得天師書道德、以往付謹民、使謹民使歸上有大仁道德之君、可以平天下之理而長安身。

【書き下し】

神は皆な以て規正し、其の根は太相にして、太相は帝王に繋がり、因りて以て天を正すこと之を行ふ。其の次根は皇后に繋がり、因りて以て地に順ひて理む。中根は衆聖に繋がり、因りて以て陰陽を理む。細微なる小根は庶民に繋がり、因りて以て萬物を理む。大人は之が爲に大を得、中人は之が爲に中を得、小人は之が爲に小を得、皆な正有るべきなり。帝王道德を行ふこと興盛なれば、日大いに明るきも、道德少なければ明少なし。皇后道德を行へば、月大いに光明なるも、道德少なければ光明少なし。衆賢道德を行へば、星曆大いに耀くも、道德少なければ耀き少なし。四根俱に道德を行へば、天下安寧にして、瑞應出で、大いに光ること遠し。遙かに天象を観れば、風雨は時に善くし、夷狄は心を歸し、災害は自ら消ゆ。今天師の道德を書するを得て、以て往きて謹民に付し、謹民をして使ひて大仁道德有るの君に歸し、<sup>たてまつ</sup>上らしめば、以て天下の理を平らかにし長く身を安んずべし。

【現代語訳】

神靈はみな邪を正へと直すのが、その根本は輔佐役であり、補佐役は帝王へとつながり、したがって天を正すのである。これに次ぐ根は皇后へとつながり、したがって大地に従って治めるのである。中根は数多の聖人へとつながり、したがって陰陽をつかさどるのである。細く細やかである小根は庶民へとつながり、したがって万物を主宰するのである。帝王のような大人は神靈の根のような行動をするために大きな効果を得、聖人賢人のような中人は中根のような行動をするために中程度の効果を得、庶民のような小人は小根のような行動をするために小さな効果しか得られないのである。帝王が道德を行うのが盛んであるために太陽は極めて明るいが、道德が少なければ明るさも少なくなる。皇后が道德を行うために月は非常に輝かしいが、道德が少なければ、輝かしさも少なくなる。数多の賢人が道德を行うために星は大いに輝いているが、道德が少なければ、輝かきも少なくなる。四つの根がともに道德を行うため、天下は安らかで平和であり、吉祥の兆候が現れてはるか遠くで大いに光るのである。かけ離れた所から天体の現象を観察すると、風雨は時宜に適って起こり、夷狄（異民族）は心から帰服し、災害は自然と消えている。もし天師が道德について書き著したものを手に入れて、つつしみ深く従う民に与え、その者を使いに出して大いなる仁と道德がある君主に帰服させ献上させたならば、天下の道理は安定したものとなり、長く身の平安をたもつことができる。

【註】

○規正

『春秋左氏傳』襄公十四年…

大夫規誨。(經)

規正。諫誨其君。(杜註)

○太相

賈誼『新書』卷五·輔佐…

大相、上承大義而啟治道、總百官之要、以調天下之宜。正身行、廣教化、脩禮樂、以美風俗、兼領而和一之、以合治安。故天下失宜、國家不治、則大相之任也。

『舊五代史』卷七十六·晉書·高祖本紀…

是日、戎王舉酒言於帝曰、「予遠來赴義、大事已成、皇帝須赴京都。今令太相溫勒兵相送至河梁、要過河者、任意多少。予亦且在此州、俟京、洛平定。便當北轅」。

○神者皆以規正、其根太相

『道要靈祇神鬼品經』靈祇神品…

太平經云、夫神者因道而行、不因德也。…又云、大神比如國家忠臣。治輔公位、名爲大神。

○其次根繫於皇后、因以順地理

『太平經鈔』卷四…

古者皇后將有爲、皆先念后土、無不包養也。無不可忍、無不有常。以是自安。與土心相得矣。

○帝王行道德興盛、日大明

『太平經鈔』卷二…日象人君。

『太平經鈔』卷八…日者、君德也。

○皇后行道德、月大光明

『禮記』昏義…

故天子之與后、猶日之與月、陰之與陽。相須而后成者也。

○衆賢行道德、星曆大耀

『太平經鈔』卷二 星象百官衆賢。

○瑞應

『西京雜記』卷三…

樊將軍噲問陸賈曰、「自古人君皆云、受命於天云有瑞應、豈有是乎」。賈應之曰、「有之。夫目矚得酒食、燈火華得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜、小既有徵、大亦宜然。故目矚則咒之、火華則拜之、乾鵲噪則餒之、蜘蛛集則放之。況天下大寶、人君重位、非天命何以得之哉。瑞者、寶也、信也。天以寶爲信、應人之德。故曰瑞應。無天命、無寶信、不可以力取也」。

## ○天師

『太平經鈔』卷五・戊部…

天師爲太平之氣出、受道德以興上皇、好有道之君、乃下及愚小民。

## その二

### 【原文】

帝王戸（校）上皇天之第一貴子也。皇后乃地之第一貴女也。夫至神聖貴人、職當居百重之内、而反憂天下萬里之外、受天業、爲陰陽六合八方持統首。天地之尊位、爲神靈所因任、上下洞極、萬物岐行之屬、莫不歸心。於是作無上靈寶謁、能知天意。明於星曆之吏、名爲太史。直事不得逋、日與夜迭上觀候天氣盛衰、三光之得失、樂得天勅戒、以自安也。十一月則修黃鍾、導地下之氣使上通、樂得后土意、以自安矣。作明堂於太陽丙午之地、爲其開八窓四達、樂通八方四時之氣、欲與八風四時之氣合其吉、以自安。明闢四門、樂得天下奇文殊策、希見之物、賢明異術、可以長安天下而消災異。

### 【校】

(一) 戸、太平經合校「疑當作『乃』」。

### 【書き下し】

帝王は上皇天の第一貴子を戸つかさどるなり。皇后は乃ち地の第一貴女なり。夫れ神聖に至るの貴人は、職は當に百重の内に居るべくも、反つて天下萬里の外を憂ひ、天業を受け、陰陽六合八方の統を持つとの首と爲る。天地の尊位は、神靈の因りて任せる所と爲り、上下洞極にして、萬物岐行の屬の心を歸せざるは莫し。是に於て無上靈寶の謁を作せば、能く天意を知る。星曆に明るきの吏は、名づけて太史と爲す。事に直たるに逋のがるるを得ず、日と夜と迭たがひに上りて天氣の盛衰、三光の得失を觀候し、天の勅戒を得んことを樂ねがひ、以て自ら安んずるなり。十一月は則ち黃鍾を修め、地下の氣を導きて上に通じせしめ、后土の意を得んことを樂ねがひ、以て自ら安んず。明堂を太陽の丙午の地に作り、其れが爲に八窓四達を開き、八方四時の氣に通ぜんことを樂ねがひ、八風四時の氣と其の吉を合せんことを欲して、以て自ら安んずるなり。四門を明闢し、天下の奇文殊策、希に見るの物、賢明の異術を得んことを樂ねがひ、以て長く天下を安んじて災異を消すべし。

### 【現代語訳】

帝王は上皇天の第一の貴子の地位にある。皇后は大地の第一貴女である。そもそも神聖に達するような貴人は、その職は当然皇宮内にあるべきであるが、かえつて天下全体の外のことまでも憂慮し、天からの業務を受け、陰陽と六合（天地と四方、天下）と八方とが統一を保っているその首となっている。天地の職位は、神靈らにより頼り任されるものであり、上から下まで通じ合い極まっております。万物は虫けらに至るまで心服しないものはない。そこで、この上なく靈妙な宝による謁見を行うと、天の意志を知ることができる。天文曆法に詳しい官吏は、太史という職名が付けられている。当直するに当たっては途中で放り出すことはできず、日中と夜間とで交代で上つて行って天氣の衰微や日月星辰の得失を觀測しては、天からの戒めを得ようとし、それによつて自身は平安を得ている。旧曆十一月には黃鍾（十二律のうちの一つ）を修め、地下の氣を導いて上へと通じさせ、后土の意志を得ようとし、それにより自身は平安を保つのである。明堂（天子が政治と教化を行う場所）を太陽の丙午の地に作り、八つの窓と四つの門を設け、八方四季の氣に通じさせて八方四季の氣と吉祥を共有しようとし、それにより自身

は平安を保つのである。何の遮るものもないように四つの門を開いて、天下の奇異な神文や別格な天書、滅多に見えない物、賢明な者による特異な術を入手しようとし、それにより長く天下を安定させ、災異を消すことができるのである。

【註】

○帝王尸上皇天之第一貴子也。

『太平經』卷九十：

天地乃以人爲子。帝王乃最天之所貴子也。

○皇后乃地之第一貴女也

『太平經鈔』卷二：

帝王、天之子也。皇后、地之子也。是天地第一神氣也。

『太平經鈔』卷四：

天子者、天之心也。皇后者、地之心也。夫心者、主持正也。

○夫至神聖貴人、職當居百重之内

『太平經鈔』卷二：

今帝王居百重之内、其用道德、仁善萬里、百姓蒙其恩、父爲慈、子爲孝、家足人給、不爲邪惡。

○三光之得失

『太平經』卷百十二：

天以三明明日月星、下照中和及地下、無有懈怠。

○后土

『太平經鈔』卷二：

土者不即化、久久即化、故稱后土。

○明堂

『禮記』明堂位：

明堂位第十四（經）

講學大夫淳于登說云、明堂在國之陽、三里之外、七里之内、丙巳之地、就陽位。上圓下方、八窻四闥。布政之宮、故稱明堂。明堂、盛貌。周公祀文王於明堂、以配上帝五精之神。太微之庭、中有五帝坐位。（孔疏）